

大学のセクシュアルマイノリティに関わるガイドラインの概要と問題点 ーテキストマイニングによる分析ー

小畑 文也*・勝 夏織**・合田 樺恋***・山本 智美†

Fumiya OBATA, Kaori KATSU, Karen GOUDA, and Tomomi YAMAMOTO

一橋アウティング事件と障害者差別解消法の施行を契機として、多くの大学がセクシュアルマイノリティに関わるガイドラインを策定した。本研究はそれらのガイドライン等の内容を精査し、対象となる性的マイノリティの範囲、誰に何を伝えようとしているのか、それに関わるコンテンツを明らかにすることを目的とした。その結果、全ての大学において、セクシュアルマイノリティ当事者、一般学生、教職員を対象に、大学の基本的な対応方針、相談窓口の案内を提示していることが明らかとなった。しかし、セクシュアルマイノリティに関しては、その範囲が明確ではなく、LGBTを対象としているもの、LGBTQ まで対象としているもの等様々であった。戸籍上の性別と自認している性別の違いとそれに伴う通称名の使用が問題としてあげられたが、これは大学のみでは対応できないこと、性別違和に関連した心の問題、カミングアウトを受けた一般学生の相談等が、大学及びその相談機関の業務になると思われた。

【キーワード】 セクシュアルマイノリティ LGBT SOGI GD テキストマイニング

1. 問題と目的

1. セクシュアルマイノリティとは

セクシュアルマイノリティとは、心と身体の性別が一致している（シスジェンダー=cis gender）異性愛者（ヘテロセクシュアル=Hetero Sexual）以外のセクシュアリティを有する者である。

まず、セクシュアリティとは広義的な意味で人間の性の在り方を指す。一方、狭義的な意味では次の3要素を指している。まず、性染色体や内・外性器などから決定される生物学的性（sex）。次に、生物学的性とは別に自分自身の性別をどのように捉えているかで決定される性自認（Gender Identity）。そして、恋愛や性愛の対象となる性別を意味する性的指向（Sexual Orientation）。その中でも、生物学的性と性自認が一致しないトランスジェンダーや、性的指向が同性であったり、両性であったりする状態の人々をセクシュアルマイノリティと呼ぶ。レズビアン（Lesbian）、ゲイ（Gay）、バイセクシュアル（Bisexual）、トランスジェンダー（Transgender）の頭文字をとったLGBTもセクシュアルマイノリティに含まれる。しかし、相手に対し恋愛感情を抱くものの性的欲求を感じないアセクシュアル（Asexual）、異性や同性に限らず全ての性が恋愛・性愛の対象であるパンセクシュアル（Pansexual）など、LGBTでは表しきれない多様なセクシュアリティが存在する。そのため、性的指向（Sexual Orientation）と性自認（Gender Identity）の頭文字をとってSOGI（ソギ／ソジ）と表記されることが多くなってきている。また、トランスジェンダーと性同一

* 山梨大学教育学部障害児教育講座

** 山梨英和大学人間文化学部

*** 山梨大学特別専攻科特別支援教育専攻

† 山梨大学学生サポートセンター

性障害者の違いだが、中西（2017）は、「性同一性障害とはあくまで医療的なケアが必要とされる場合の診断名であり、トランスジェンダーの中には自分の性別に違和感（性別違和）を持ちはするものの、特に医療的な治療を必要としない者もいる」と述べている。

加えると、自身の意思で性別の決定を行わないノンバイナリー（Non-Binary, X ジェンダー、第三の性ともいわれる）や、いわゆるグレーゾーン（性自認、性的志向が明確ではない、あるいは決めることができない）になるジェンダーレス（Genderless）やクィア（Queer）、クエスチョニング（Questioning）等の概念も様々な視点から提唱されており、メディア等ではこれらの概念の混同や誤用が多々見られるが、実際には厳密な区別は困難であろう。

本研究では、性別違和（Gender Dysphoria；以下、GD）を感じている者を、自覚・無自覚を問わずにセクシュアルマイノリティとし、LGBT は性自認・性的指向が明確な者、性同一性障害は医療的介入が必要な者、LGBTQ は片桐・辻河（2018）のいう「二つの Q」（Queer あるいは Questioning）の包含するものとする^{*1}。

2. セクシュアルマイノリティの現状

文部科学省は 2015 年に「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」を公表しており、全体として 606 件の報告があったことを報告している。回答件数（回収率）が少なかったこともあるが、これは後に行われた調査の結果から見ても明らかに過小な数字である。

電通ダイバーシティ・ラボ（以下、DDL）は、2018 年に 20～59 歳の 6 万人を調査対象に LGBT に関する調査を実施した。調査の結果、日本におけるセクシュアルマイノリティ当事者の割合は対象者の 8.9%であった。また、LGBT という言葉の浸透率は 68.5%と高い割合を示している。DDL はこの結果に対し、「LGBT に関する情報やコンテンツが様々なメディアで取り上げられ、情報量が増加したことにより、言葉の認知度が急激に上昇した」（電通ダイバーシティ・ラボ、2018）と推測している。すなわち 13 人に一人が LGBT あるいはその傾向を持つものになる。しかしながら、「働き方と暮らしの多様性と共生」研究チームが 2019 年に行った大規模調査では、「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生に関するアンケート」では LGBT の人口比は 3%と下方修正されている。

この違いについては、「働き方と暮らしの多様性と共生」研究チームの調査が LGBT を対象にしたのに対し、DDL は LGBTQ を含んでいるという指摘があるが、どこまでが LGBT かどこからが LGBTQ かという境界線は明確なものではない。これらの調査結果から言えることは、何らかの GD を持っているものが 9%程度、またその傾向が明確な者が 3%程度いるととらえることが妥当なように思われる。またセクシュアルマイノリティの中には、アセクシュアル、バイロマンティック（Bi-Romantic）等、通常自覚を持たないまま過ごし、結婚や夫婦生活等の場面になって問題として浮かび上がる特性を持つ者もいることから、これらの問題を低く見積もることは危険であるともいえる。

3. セクシュアルマイノリティと合理的配慮

2013 年に障害者差別解消法が国会で成立した。これにより公的機関には相談窓口の設置が義務化された。セクシュアルマイノリティを「障害」の範疇に入れることは、諸説があり、また当事者にも様々な考えがある。ただ「性同一性障害」が、DSM-5 では「性別違和」（Gender Dysphoria）、ICD-11 では「性別不合」（Gender incongruence）と改称されていることから、今後はヒトの特性の一つとして位置づけられてくると思われる。しかしながら、障害者差別解消法における障害者は、自分の持つハンディや、特性に対して何

らかの合理的配慮が必要とする場合に、自己申告するものであり、旧来の法的なカテゴリーとは異なるものである。性的違和により、トイレや更衣室の使用に困難や違和感を覚えるとき等は、当然に合理的配慮を要請できる。加えて、2015年にはいわゆる「一橋大学アウティング事件」が起き、学生の命が奪われた。このことより学校、企業を問わずに、「LGBTハンドブック」の類が発行されるようになった。本学（山梨大学）においても、性別違和を持つ学生や、明確にLGBTである学生が在籍していることから、セクシュアルマイノリティに対するガイドラインの作成は急務である。

そこで、本研究ではインターネット上で公開されている各大学のガイドラインやハンドブックを精査し、対象となるセクシュアルマイノリティの範囲、誰に何を伝えようとしているのか、それに関わるコンテンツを明らかにすることを目的とした。本研究の結果をもとに、より実用的なガイドラインを作成するための基礎資料としたい。

II. 方法

1. 分析対象

2021年6月の時点でインターネット上に公開されていた日本の大学のLGBTに関わるガイドライン等を分析対象とした。本研究で分析対象となったガイドラインをTable1に示す。

2. 手続き

対象となったガイドライン等の全文を、株式会社ユーザーローカルの公開するテキストマイニングツール（<https://textmining.userlocal.jp/>）によって分析した。このツールは、

- ① 従前のKHコーダー等で必要であった、頻出一般単語の削除等の文章の整形を自動的に行うこと。
- ② 出現頻度ではなく「一般的な文書でよく出る単語は、重要ではないため、重み付けを軽くし、一般的な文書ではあまり出現しないけれど、調査対象の文書だけに多く出現する単語は重視する」ために「スコア」を算出しそれを元に対応分析までを行うこと。
- ③ WEB上のツールであるため、これまで分析文字数がハードウェアのメモリ容量に依存していたものが、ユーザー登録によって実質無制限になる。

等の利点があることから採用した。

III. 結果と考察

1. ワードクラウドについて

再頻出（重要）単語は主語である「本学」であったが、大学のガイドラインという文書の性格上「一般的な文書でよく出る単語」に準じるものとして、分析からは除外した。Fig.1は分析結果である。

大学において「性別」に関する「相談窓口」があるということを周知することは、どこも重要なことである。対象は「教職員」「学生」「LGBT」当事者であり、それぞれに相談に「応じ」、それに「基づく」「対応」を行っている。「通称名」「氏名」「性自認」「カミングアウト」「実習」のスコアも高く、留意点としての関心が高いことが窺われたが、この点については共起キーワード以降で説明をする。

Table 1 本研究において分析対象としたガイドライン

大学名	ガイドライン名称	URL
大阪大学	SOGIの多様性に関する学生への配慮・対応ガイドライン	https://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/student/general/2101
お茶の水女子大学	トランスジェンダー学生受入れに関する対応ガイドライン	https://www.ocha.ac.jp/news/20190528.html
京都産業大学	対応ガイドライン	https://www.kyoto-su.ac.jp/about/torikumi/r_support/guidelines.html
群馬大学	性の多様性（LGBT/ SOGI）に関する対応ガイドライン	https://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/wp-content/uploads/2019/04/danjoyo_guidelines.pdf
静岡産業大学	性的マイノリティへの対応ガイドライン	https://www.ssu.ac.jp/media/sexualminority_201904.pdf
東京都立大学	セクシュアル・マイノリティに関する東京都立大学の対応ガイドライン	https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/images/TMU_support_guidelines_for_SOGI-LGBT_2020.pdf
徳島大学	性の多様性（LGBT等）に関する理念と対応ガイドライン～学生の修学のために～	https://www.tokushima.ac.jp/fs/2/5/0/6/0/8/_/20210402LGBT_guideline2021____.pdf
長岡技術科学大学	学生のLGBT等に関する対応ガイドライン	https://www.nagaokaut.ac.jp/gakusei/campus_life/807034.files/LGBT_guideline.pdf
長崎大学	LGBT等性的マイノリティに関する対応ガイドライン	https://www.cdi.nagasaki-u.ac.jp/lgbt-guidelines/
名古屋大学	LGBT等に関する名古屋大学の基本理念と対応ガイドライン	https://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/upload_images/guideline03162021.pdf
広島大学	「性の多様性に関する理念と対応ガイドライン—LGBT等の学生の修学のために—	https://www.hiroshima-u.ac.jp/system/files/133428/Policies_and_Guidelines_for_Respecting_Gender_and_Sexual_Diversity_JP.pdf
宮城学院女子大学	トランスジェンダー学生の受け入れに関するガイドライン	https://news.mgu.ac.jp/campus/wp-content/uploads/sites/14/2020/06/mgu_guideline_NT20200615.pdf
山形大学	多様な性に関するガイドライン	http://www.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/danjo/modules/xelfinder/index.php/view/1114/guideline-20210312-01.pdf
山口大学	多様な性的指向と性自認（SOGI：ソジ）を尊重する基本理念と対応ガイドライン	http://www.yamaguchi-u.ac.jp/diversity/approach/03.html#02
早稲田大学	セクシュアルマイノリティ支援	https://www.waseda.jp/inst/diversity/support/sexual-minority/
龍谷大学	性的指向、性自認等に関する本学の対応について	https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/committee/sexual_minority.html

大学名の50音順。以上は全て2021年6月30日に取得した。



Fig.1 大学におけるLGBTガイドラインのワードクラウド

が、「親友からカミングアウトを受けた異性愛者は、同性愛者一般には肯定的になるが、その親友に対しては回避的になる」という、欧米と比すると複雑な心理的变化があることを明らかにしている。「一橋大学アウティング事件」も同様な心理的变化と社会的感染（一緒にいると自分も同じだと思われる）への不安が生み出した悲劇であろう。このような問題に関して、大学やその相談機関が介入することは有効な手段の一つであり、今後、相談窓口の業務の一つとなっていくことも考えられる。

また、学科や専攻にもよるが、実習等での配慮も必要となる。多くの実習先では、実習開始後のトラブルを防ぐために、事前の情報を必要とする。この場合も、個人情報の保護に十分注意しながら、当事者の状況を伝え、必要な場合は実習先と共に環境の調整を行う必要もあろう。

3. 階層的クラスタリング（対応分析）の結果について

Fig.3 に示したように、分析の性格上、共起キーワード分析と同様の結果が得られた。類似度（横軸）0.3～0.4 に注目すると、「戸籍」に関わる「性別」や「氏名」「通称名」について大学側が共通して配慮していることがわかる。また、類似度0.5前後から見ると「授業」「実習」「教職員」の相談は窓口において配慮していることが窺われる。

4. ガイドラインで言及している専門用語について

これは、ガイドラインがどの範囲のLGBTを念頭に置いているかを検討するものであり、スコアでなく各単語の出現頻度について検討した。結果はTable2に示すとおりであった。

今回分析したガイドラインに限らず、今後作成されるものも、LGBTの傾向が顕著な学生を想定し、それら学生に対して大学の対応方針、相談窓口を知らせること、教職員や一般学生に対し、対応の方法を教え、啓蒙を行うことが目的となっていると思われる。ごく一部の大学ではLGBTQにも言及しているが、自身のGDに悩む学生やいわゆるグレーゾーンにある学生、無自覚な学生は明確な対象にはなっていない。先述したように「大阪市の働き方と暮らしの多様性と共生に関するアンケート」で示された3%は対象としているが、DDLによる8.9%あるいはそれ以上の者は明確な対象としていないことになると思われる。

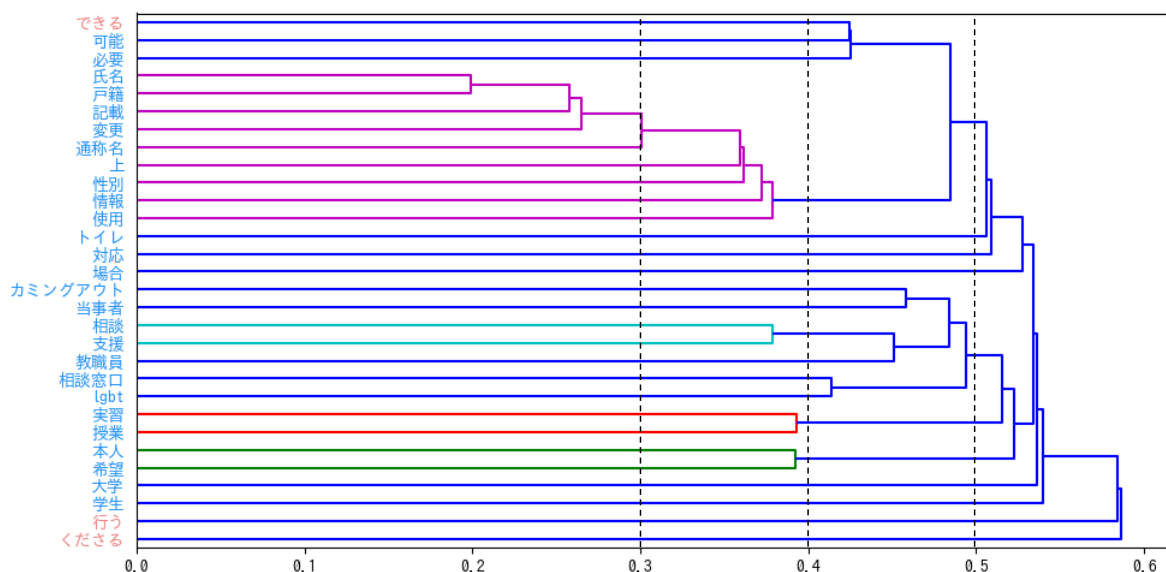


Fig.3 階層的クラスタリング（対応分析）の結果

Table 2 セクシュアルマイノリティに関する語句の出現頻度

品詞	単語	出現回数
名詞	lgbt	80
名詞	カミングアウト	67
名詞	性自認	56
名詞	性的指向	48
名詞	アウティング	41
名詞	sogi	40
名詞	性同一性障害	33
名詞	セクシュアル・マイノリティ	21
名詞	性的マイノリティ	21
名詞	トランスジェンダー	21
名詞	アライ	17
名詞	セクシュアリティ	14
名詞	ゲイ	6
名詞	バイセクシュアル	5
名詞	レズビアン	5
名詞	レインボー	5
名詞	transgender	4
名詞	lesbian	4
名詞	bisexual	4
名詞	gay	4
名詞	性的少数者	4
名詞	ジェンダー	4
名詞	パートナー	4
名詞	フィッティングボード	3
名詞	ピアサポート	3
名詞	異性愛	3
名詞	トランスジェンダー	3

IV. まとめ

セクシュアルマイノリティに関して、学び考える機会は高等学校までの間は極めて少ないであろう。大学段階では全ての青年を対象にはできないが、自覚という点では適期であり、学びという点ではほぼ最後になる。セクシュアルマイノリティについての知識や自覚は、その後の人生で本人だけではなく、パートナー、配偶者、家族への影響も大きいものである（杉浦，2013；三部，2014 など）。メンタルヘルス（薬物乱用，暴力，鬱病等）に関してはLGBTとその家族の有病率が高いという報告は多く（例えば，松本，2021；岡本，2021 他），一部は大学の相談機関での対応も必要になろう。その点で，これまで公開されたガイドライン等は限定的であり，セクシュアルマイノリティをより広くとらえ，一人ひとりの問題として考える機会を与える必要があるように思われる。

* 1 LGBTQ 当事者との面接の過程で Queer と Questioning は当事者においても明確な区別がなく，多くは Questioning の意味で使っていることから，本研究では包摂して扱った。

付 記

本文中，性同一性障害，LGBT，GD が統一せずに用いられている場合があるが，これは参考文献の用語に従ったものである。なお，本研究は構想と分析，執筆を主として小畑が，執筆と考察の一部を勝，文書の整形と並行分析を合田，素材文書の収集を山本が担当した。

文 献

- 1) 電通ダイバーシティ・ラボ (2018) LGBT 調査 2018. www.dentsu.co.jp/news/release/2019/0110-009728.html, 2021 年 8 月 1 日閲覧.
- 2) 「働き方と暮らしの多様性と共生」研究チーム (2019) 大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート. <http://acv.osaka-chosa.jp/>, 2021 年 8 月 1 日閲覧.
- 3) 片桐亜希・辻河昌登 (2018) 曖昧で多義的なセクシュアリティを生きる LGBTQ 当事者の語りー「バイ」と「ノンケ」の二択を超えてー. 兵庫教育大学教育実践学論集, 19, 37-47.
- 4) 松本洋輔 (2012) セクシュアルマイノリティとメンタルヘルス. 心身医学, 61 (7), 599-607.
- 5) 三部倫子 (2014) カムアウトする親子：同性愛と家族の社会学. 御茶の水書房.
- 6) 文部科学省 (2014) 学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1322368_01.pdf, 2021 年 8 月 1 日閲覧.
- 7) 中西絵里 (2017) LGBT の現状と課題ー性的指向又は性自認に関する差別とその解消への動きー. 参議院常任委員会調査室・特別室, 立法と調査.
- 8) 岡本百合 (2021) 大学生における LGBT. 心身医学, 61 (7), 624-628.
- 9) 杉浦郁子 (2013) 「性同一性障害」概念は親子関係にどんな経験をもたらすかー性別違和感をめぐる経験の多様化と概念の変容に注目してー. 家族社会学研究, 25 (2), 148-160.
- 10) 鈴木文子・池上知子 (2020) カミングアウトによる態度変容：ジェンダー自尊心の調整効果. 心理学研究, 91 (4), 235-245.